



フィクションは哲学に直結する

魚豊

(作家、漫画家)

中世ヨーロッパを舞台に、地動説をめぐる信念に命を懸ける人々を描く『チ。―地球の運動について―』は、手塚治虫文化賞のマンガ大賞をはじめ数々の漫画賞を受賞し、TVアニメ化されるなど、多くの反響を呼んだ。また、恋と陰謀論をテーマにした最新作『ようこそ！FACT（東京S区第二支部）へ』も話題の魚豊氏に、哲学とのかかわり、創作への思いを聞いた。

倫理の授業から始まった 哲学への強い関心

——大学時代は哲学科に在籍されていたそうですが、きっかけはなんだったのでしょうか。

魚豊 もともと哲学に関心は持っていたのですが、それが顕著になったのは、高校の倫理の授業でした。勉強はまったくできなかったし、やる気もなかったのですが、それでも思想とか哲学の歴史を一から学んでみると、やはりほかの学問とはまるで異なるものだと感じられました。

に、この世界の奇妙なシステムを感じます。

また、取り立ててかしこい人が哲学に興味を持つわけでもなければ、周囲にバカだと思われる人たちが哲学に興味を持たないわけでもありません。

そうした中で、僕の世代に関して思うのは、子どもの頃からずっと、世の中の安定やルールが崩壊に向かい、「日本はもう終わるよ」と言われ続けてきたため、「じゃあ、なぜ自分は生まれできたの？」とか、「この世の中って、なんなの？」といった疑問を持つ人が生まれやすかったような気がします。

——なるほど。環境や志向性によっては、哲学ではなく宗教に傾倒する人もいそうですね。

魚豊 そうですね。それこそ一九八〇年代のニュー・アカデミズムから続く現代思想と新興宗教のブームがあつて、その後、オウム真理教の事件があつて、それが破綻した直後のタイミングで生まれたのが僕らの世代です。

だから新宗教に走ることもできず、成長神話にも飛びつせず、地味に哲学へ向かうしかなかったのかもしれない。もちろんそれ以前に、二〇〇〇年代のビジネス書ブームがあるので。もともと、僕は齧った程度の経験でしかなく、真面目に哲学を勉強してきたと胸を張って

議論させるんです。ただ、それはさしてクオリ

ティの高い議論ではなくて、どちらかというと先生にやる気がないので放置されていただけなのかもしれません(笑)。

でもだからこそ、自分たちで議論する中で、いろいろ調べる必要があつたのは事実です。本当は、もっとレベルの高い人たちがやるべき学び方なのでしょうけどね。

——当時、とりわけ感銘を受けた哲学者、あるいは文献は何でしょう。

魚豊 プラトンの『ソクラテスの弁明』などはやはり良かったですね。僕は中公クラシックスで読みましたが、二千数百年前の著述が普通に書店で売られていること自体がなんだか不思議に思いましたし、著者近影のところにプラトンの石像が載っていたのも初めての体験すぎて。それでもしっかりリアリティをもって読み進められることに驚いたのを覚えています。

——魚豊さんは二〇代ですが、現代の若い世代がこうして哲学に傾倒するのはなぜでしょう。

魚豊 個人的に興味深いのは、どのような社会環境であつても、こういうヒエラルキーにいて、哲学に興味ある人が必ず一定数発生することです。逆に言えば常に一定数しか発生しないのですが、何年経つても再生産され続けること

例えば、古代ギリシャの哲学者タレスの言葉

「万物の根源は水である」など、現代から見たら「超嘘だし、間違ってるし」と思いつつ、それなのに二〇〇〇年後、三〇〇〇年後のいまの自分にも響くアクチアルな言葉を語ってたりして、明らかにほかの科目から浮いていて、とても魅力を感じました。また、当時から漫画家になりたいと思っていたので、将来の役に立ちそうだという興味もあつたかもしれません。

——やはり、高校で学ぶ倫理は哲学と地続きのものなんですね。

魚豊 そう思います。高校の倫理は思想的な側面が強く、おかげで楽しめました。それで大学へ進む際に哲学科を選択したわけですが、僕は授業にはほとんど出ていなくて、中退しました。でもゼミだけは中退後も通い続ける違法なてんぷら学生をやってみました。なので、大学で哲学的知識を学んだというよりも、ゼミで出会った友人たちから自然に学んだことのほうが大きかったと思います。周りはずっと批評とか思想の本を読んでいるような哲学オタクばかりだったので、自ずと情報量は増えましたね。

——大学を辞めてからもなお通いたくらい、魅力のあるゼミだったんですね。

魚豊 すごく自由なゼミで、いつも学生同士で